

華岡家門人録の特徴について

—出雲国の門人37人の分析を通して—

梶谷 光弘

島根大学医学部

受付：平成27年5月19日／受理：平成27年10月9日

要旨：華岡青洲末裔宅には未発表の門人録が1冊所蔵されている。題簽には「四海門□□」とあり、内容から判断すると、年次順門人録「門人録」の後編である。これを含めると、華岡家の門人録は9冊、8種となり、そこから出雲国の門人を数えると、総勢で37人となる。ところが、これらすべての門人を記載しているものは1冊も存在していない。そのため、今後、華岡青洲や華岡流医術の研究を進めていく際には、各々の門人録の特徴を十分把握した上で活用することが大切である。その中でも華岡青洲末裔が所蔵する「門人録」・「四海門□□」、「青洲華岡先生門人姓名録」、華岡鹿城末裔が所蔵する「華岡門人録」は、内容的にも非常に貴重であり、必見の資料である。

キーワード：華岡青洲、華岡鹿城、華岡家門人録、出雲国門人、門人録の特徴

華岡青洲は、文化元年(1804)10月13日、初めて全身麻酔により「和州宇知郡五条駅藍屋利兵衛母 名勘」¹⁾の乳岩^{2,3)}手術を執刀した。続いて、文化2年(1805)正月6日にも「同国 狐井村彦右衛門 内」を執刀したが、2月26日には、最初に執刀した勘が亡くなった⁴⁾。

一方、紀州平山に在った華岡家の「春林軒」への入門は安永9年(1780)から始まり、享和3年(1803)に7人、文化元年(1804)には11人と順調に増加したが、勘が亡くなった文化2年(1805)は一人もいなかった⁵⁾。

ところが、青洲が乳岩手術を再開し、文化3年(1806)6月に「紀州和歌山鍛冶橋広瀬 大田屋太郎兵衛 内」、7月に「伯州下広口村 善次 母」を執刀すると⁶⁾、この年から入門者が増えだした⁷⁾。その後、各地から入門者が「春林軒」を訪ねるようになったため、文化13年(1816)、大坂に分塾「合水堂」を開き⁸⁾、そこは実弟鹿城に任せた。

その結果、多くの門人によって華岡流医術は各地に伝播し、「麻沸湯」・「麻沸」・「麻薬」⁹⁾による乳岩などの外科手術が頻繁に行われるようになった。

著者は、これまで華岡家門人である大森泰輔・加善らの資料を通して、華岡家の「春林軒」・「合水堂」の実態や、彼らが修得した華岡流医術の地方伝播の様子などについて研究してきた¹⁰⁻¹³⁾。

また、華岡青洲末裔宅や青洲の実弟である華岡鹿城の末裔宅、医聖華岡青洲顕彰会に所蔵される門人録を翻刻し、公表してきた¹⁴⁻¹⁶⁾。この他、武田科学財団杏雨書屋や内藤記念くすり博物館、国際日本文化研究センター等が所蔵する門人録も閲覧した。

本稿では、平成24年(2012)9月、著者が札幌市の華岡青洲末裔宅を訪ね、そこで閲覧した年次順門人録¹⁷⁾「四海門□□(□□は解読不能)」を紹介し、これは高橋克伸氏が以前に公表した年次順門人録「門人録」¹⁸⁾の後編であることを明らかにする。続いて、そこから「雲州」出身者のみを翻刻し、「雲州」と「出雲」¹⁹⁾、いわゆる出雲国の門人37人を確定し、彼らを通して華岡家門人録の特徴を明らかにする。そして、今後、華岡青洲や華岡流医術などについて研究する場合には、各々の門人録の特徴を十分踏まえた上で活用する必要

があることを論じるものである。

1. これまでに公表された華岡家門人録

華岡家門人録は、大正12年(1923)、呉秀三氏が『華岡青洲先生及其外科』の中で公表した「華岡青洲先生春林軒門人録」が最初である。

呉氏は、これをまとめる際、入門順の帳簿である「甲」と、国別の帳簿である「乙」の2種を参照し²⁰⁾、たまたま「乙」の「安芸の部に私の外曾祖父たる山田好謙の名を発見」²¹⁾したという経緯があった。

しかし、出身地から考えて「伯耆」に入るべき「八橋郡赤崎駅 池本謙貞」と「八橋郡八橋 今井鉄太郎」らは「出雲」の中に記載され²²⁾、明らかな誤りがみられた。この誤りは、昭和39年(1964)に公表された『医聖華岡青洲』所収「華岡医塾門人録」でも踏襲された²³⁾。

これらを含め、現在までに公表された華岡家門人録は資料1のとおりである。

2. 年次順門人録「四海門□□」 (華岡青洲末裔所蔵)の価値

平成24年(2012)9月、著者は札幌市の華岡

青洲末裔宅を訪ね、所蔵されていた次の4冊の門人録を閲覧した。

- ・「稚府春林軒 門人姓名録」1冊
- ・「青洲華岡先生門人姓名録」1冊
- ・「門人録」1冊
- ・「四海門□□」1冊

このうち「稚府春林軒 門人姓名録」と「青洲華岡先生門人姓名録」はすでに著者が公表し(資料1E・F)、「門人録」は以前に高橋克伸氏が公表した(資料1C)。

残りの1冊は題簽が破損しているが、「四海門□□」と読み、まだ公表されていない門人録である。これは「文政十二己丑(1829)仲冬十一日水府 林友輔 江戸木場二丁目 請人升屋平兵衛」から書き出され、最後は「明治十五年(1882)五月廿七日 和歌山県紀伊国和歌山区湊西組材木丁四拾六番地 小山田竹次郎 二十六歳 右請人華岡新兵衛」で終わっている。そのあと14丁ほど白紙が続き、巻末に「文久元(1861)辛酉仲冬六日 長陽永富徴装焉 春林軒蔵」と書かれた全230丁のものである。

この最初に記載された林友輔と、2番目の久保掃郎の入門期日は、「門人録」の最後に記載され

資料1 これまでに公表された華岡家門人録

門人録名	文献名
A 華岡青洲先生春林軒門人録	呉秀三. 華岡青洲先生及其外科. 復刻版. 東京: 大空社; 1994. p.448-518 (注)
B 華岡医塾門人録	森慶三・市原硬・竹林弘. 医聖華岡青洲. 和歌山: 医聖華岡青洲先生顕彰会; 1964. p.304-346
C 門人録	高橋克伸校訂. 華岡家所蔵「門人録」翻刻資料. 国立歴史民俗博物館研究報告 2004; 116: 498-537
D 華岡門人録	梶谷光弘. 華岡鹿城末裔所蔵の「華岡門人録」について (1)-(4). 日本医史学雑誌 2012; 58(1): 75-84・58(3): 401-409・58(4): 493-501・2013; 59(1): 97-104
E 稚府春林軒 門人姓名録	梶谷光弘. 華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について (1)-(2). 日本医史学雑誌 2013; 59(3): 425-440・59(4): 571-577
F 青洲華岡先生門人姓名録	梶谷光弘. 華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について (2)-(4). 日本医史学雑誌 2013; 59(4): 577-585・2014; 60(1): 71-85・60(3): 285-296
G 華岡門人姓名録	高橋克伸. 佐藤寛吾写「華岡門人姓名録」について・上. 和歌山市立博物館研究紀要 2013; (28): 21-33
H 青洲華岡先生門人姓名録	梶谷光弘. 飯塚玄道が筆写した「青洲華岡先生門人姓名録」について. 古代文化研究 2014; (22): 87-110

(注) 大空社から伝記叢書として平成6年(1994)に発行された『華岡青洲先生及其外科』は、大正12年(1923)に吐鳳堂書店から発行された同名の著書の扉から奥付までを原寸収録し、巻末には新たに「解説」を付している。

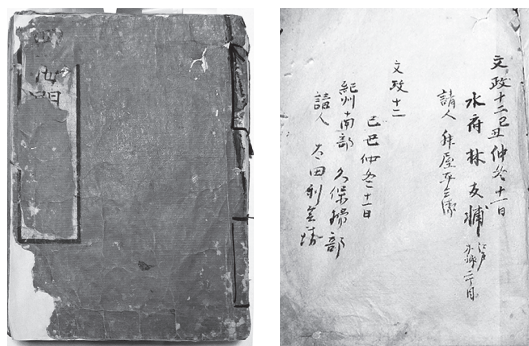


写真1 年次順門人録「四海門□□」表紙・1丁オ

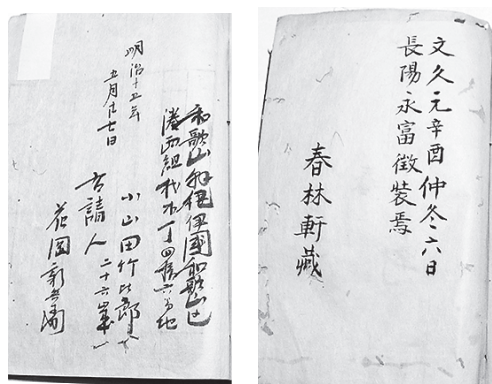


写真2 年次順門人録「四海門□□」215丁オ・巻末

た「江州甲賀郡寺庄村 林周平」と同じ「文政十二己丑仲冬十一日」である²⁴⁾。

一方、ここに記載されている門人の入門期日、住所、姓名、請（更）人名、紹介者などの項目は、「門人録」とまったく同じである。

記載された門人数は、「門人録」の899人²⁵⁾に対して「四海門□□」が1,161人²⁶⁾、また、年平均入門者数も前者が18.3人、後者が21.8人となり、「四海門□□」がもつ価値はとても高い。

つまり、この「四海門□□」は、安政7年（1860）2月7日に入門した「長州船木 永富亭」²⁷⁾が、文久元年（1861）11月6日、「春林軒」に所蔵されていた門人録を装丁し²⁸⁾、その後も記載されることを予想して白紙を綴り、華岡厚堂が没する2ヶ月ほど前に入門した小山田竹次郎²⁹⁾を最後に記載を終えたものだと考えられる。

したがって、安永9年（1780）9月、華岡青洲（3代随賢）が21歳の時に入門した下村了庵から始

まる「門人録」と、華岡鷺州（4代）を経て厚堂（5代）が亡くなる直前の明治15年（1882）5月27日に入門した小山田竹次郎で終わる「四海門□□」は、2冊で1組の年次順門人録であり、華岡家門人の全貌が把握できるものである。その上、これまで華岡青洲末裔宅に所蔵されたものであり、非常に貴重な資料であると言える。

3. 華岡家門人録の概要

華岡家門人録は、これまでに公表された門人録8冊に今回紹介した「四海門□□」1冊を加えて、合計9冊となる。ただし、「門人録」と「四海門□□」が2冊で1組の年次順門人録であるため、9冊で8種ということになる。

ここで、それらの門人録の概要をまとめると、資料2のようにになる。

4. 年次順門人録の後編「四海門□□」に記載された「雲州」出身の門人（翻刻）

資料2に掲げた華岡家門人録9冊、8種のうち、まだ公表されていないものは、年次順門人録の後編「四海門□□」（縦25.9cm、横18.6cm。本文216丁、白紙14丁、全230丁）である。

そこには、「雲州」から入門した門人が次のように記載されている。

【凡例】

- 資料はすべて縦書きだが、本稿では横書きとし、できる限り新字体を使用する。
- 著者が挿入した部分は（ ）で記し、誤りと思われる場合には（ママ）、断定を差し控える場合は（カ）を付して記載する。
- 重ねて書かれ、文字が判読できない部分は■で示す。

〔30丁ウ〕

合水堂 同年（天保4年）三月二日
入門 雲州母里 大森泰輔
請人 大坂 橋本屋治助

〔39丁ウ〕

同（合水堂）天保六年正月廿九日

資料2 華岡家門人録の概要

	門人録名	記載内容	原本所蔵者	記載期間	門人総数	年平均 入門者数
A	華岡青洲先生春林軒門人録	国別門人録	不明	1780~1864年	1,883人(注1)	22.4人
B	華岡医塾門人録	国別門人録	不明	1780~1867年	1,889人	21.7人
C	門人録	年次順門人録 (前編)	華岡青洲末裔	1780~1829年	899人	18.3人
	四海門□□	年次順門人録 (後編)	華岡青洲末裔	1829~1882年	1,161人	21.9人
D	華岡門人録	国別門人録	華岡鹿城末裔	1780~1868年	2,004人	22.7人
E	稚府春林軒 門人姓名録	国別門人録	華岡青洲末裔	1780~1877年	1,150人	11.8人
F	青洲華岡先生門人姓名録	国別門人録	華岡青洲末裔	1780~1881年	1,852人	18.3人
G	華岡門人姓名録	国別門人録	個人蔵	1780~1835年	1,053人	19.1人
H	青洲華岡先生門人姓名録	国別門人録	医聖華岡青洲顕彰会	1780~1846年(注2)	1,232人	18.6人

(注1) 「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)には「門人スベテ一千八百八十七人ナリ」と書かれているが、数えると1,883人となり、4人少ない。また、「元治以後ノ門人国別数」の305人は姓名が書かれていないため、門人総数には加えていない。

(注2) 梶谷光弘「華岡家門人錦織玄道が筆写した『華岡青洲先生 門人姓名録』について(翻刻)」の中で、最初の門人を「天明8年(1788)に入門した中川修亭(山城)」としたが、「安永9年(1780)に入門した下村了庵(紀伊)」の誤りである。(107)

出雲 大森加膳

雲州神門郡小田村 井上惇達

請人 橋本屋治助 [122 丁オ]

[46 丁ウ]

雲州嶋根郡三穂関

合水堂 天保七丙申年七月廿九日

同年(嘉永5年)同月(5月)十九日

雲州島根郡松江片原町 梶谷昌軒

井上謙造

請人 橋本屋治介 [124 丁オ]

[51 丁オ]

雲州神門郡今市村

同(合水堂) 同年(天保9年)六月廿四日

同年(嘉永6年)二月三日 小林友庵

雲州神門郡古去(ママ)村 飯塚養運

[125 丁ウ]

請人(ママ)

雲州神門郡指海村

[61 丁オ]

同年(嘉永6年)四月十二日

合水堂 同年(天保11年)同月同日(5月15日)

西原俊庵

雲州仁多郡竹崎村 鈴木景順

[140 丁オ]

[64 丁ウ]

請人 新太郎

同(合水堂) 同年(天保12年)六月廿五日

雲州広瀬藩 川井春水

雲州神門郡武志村 大田太仲

同年(安政4年)四月十一日

[75 丁ウ]

天保十五辰(年)三月十四日

[141 丁オ]

雲州木次町 錦織玄道

同(合水堂) 雲州秋鹿郡上大野村 清水順民

請人 居垣兼助

同(安政4年)六月十五日

[113 丁オ]

[141 丁ウ]

同(嘉永3年)五月十二日

同(合水堂) 雲州能儀郡母里

(安政4年)閏五月■三日 大森加善

[147丁ウ]

同(合水堂)同(安政)五午(年)六月八日
雲州能儀郡荒島村 米原文質

[169丁オ]

雲州道玄(意字カ)郡大根嶋
文久三(年)二月廿四日 岩田玄真

[170丁オ]

雲州藩
(元治元年)六月十四日 牧内典禮

[174丁オ]

慶応元(年)五月七日

同(合水堂)雲州楯縫郡平田村灘分 牧野春斎

[181丁オ]

雲州仁多郡亀嵩町

同(合水堂)慶応三丁卯歳 福嶋元恭
三月朔日

ここに記載された「雲州」の門人は、大森泰輔から福嶋元恭まで19人である。

したがって、「門人録」と「四海門□□」に記載された「雲州」の門人は、前者の14人と合わせ、総数で33人となる。

5. 華岡家門人録にみる出雲国の門人

華岡家門人録から「雲州」と「出雲」、いわゆる出雲国の門人の姓名が記載されているかどうかを一覧にすると、資料3のようになる。

なお、以下の資料3～6に示す門人名とその順序は、年次順門人録「門人録」・「四海門□□」(C)によるものである。そこに記載がない20井上、27管、28舟木、37守田は、「華岡門人録」(D)、「青洲華岡先生門人姓名録」(F)から加筆した。

資料3 門人名の記載の有無
(記載がある場合のみ○印を付す。)

- A 華岡青洲先生春林軒門人録
- B 華岡医塾門人録
- C 門人録・四海門□□
- D 華岡門人録
- E 稚府春林軒 門人姓名録
- F 青洲華岡先生門人姓名録
- G 華岡門人姓名録
- H 青洲華岡先生門人姓名録

門人名		記載の有無							
		A	B	C	D	E	F	G	H
1	高橋以忠	○	○	○	○	○	○	○	○
2	市川恭庵	○	○	○	○	○	○	○	○
3	西山砂保	○	○	○	○	○	○	○	○
4	中嶋道順	○	○	○	○	○	○	○	○
5	岡谷東民	○	○	○	○	○	○	○	○
6	小池文専	○	○	○	○	○	○	○	○
7	竹内周貞	○	○	○	○	○	○	○	○
8	古瀬保庵	○	○	○	○	○	○	○	○
9	小林文慶	○	○	○	○	○	○	○	○
10	石塚此面	○	○	○	○	○	○	○	○
11	広瀬玄廸	○	○	○	○	○	○	○	○
12	樋野壽山	○	○	○	○	○	○	○	○
13	長崎正伯	○	○	○	○	○	○	○	○
14	大田祐才	○	○	○	○	○	○	○	○
15	大森泰輔	○	○	○	○		○	○	○
16	大森加膳	○	○	○	○		○	○	○
17	梶谷昌軒	○	○	○	○				
18	飯塚養運	○	○	○	○		○		○
19	鈴木景順	○	○	○	○		○		○
20	井上橘水				○				
21	大田太仲	○	○	○	○		○		○
22	錦織玄道	○	○	○	○	○	○		○
23	井上惇達	○	○	○	○		○		
24	井上謙造	○	○	○	○		○		
25	小林友庵	○	○	○	○		○		
26	西原俊庵	○	○	○	○		○		
27	管 文淑	○	○		○		○		
28	舟木俊造	○	○		○		○		
29	川井春水	○	○	○	○	○	○		
30	清水順民	○	○	○	○		○		
31	大森加善	○	○	○	○		○		
32	米原文質	○	○	○	○		○		
33	岩田玄真	○	○	○	○	○	○		
34	牧内典禮			○	○				
35	牧野春斎			○	○				
36	福嶋元恭			○	○				

37	守田文亭					○		
門人総数	32	32	33	36	17	32	16	17

(注) 7竹内周貞と竹田周貞(D・E・F・G・H), 8古瀬保庵と古瀬玄迪(D), 12樋野壽山と樋口寿山(D)・樋野寿仙(E), 27菅文淑と菅文叔(D)は, 同一人物と判断した。

資料3によって, 出雲国の華岡家門人は37人だったことが判明する。また, これら37人の門人を全員漏れなく記載した華岡家門人録は, これまでに発表されたものの中にはまったく存在していないことも明らかである。

一方, 華岡家門人録の嚆矢である「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)では, 国別の門人名を掲載した後に「元治以後ノ門人国別数」として「出雲四」³⁰⁾とした。この4人は「四海門□□」(C)に記載されている34牧内, 35牧野, 36福島と, 「青洲華岡先生門人姓名録」(F)の37守田であろう。

つまり, 呉氏は「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)³¹⁾をまとめる際, 「門人録」・「四海門□□」(C)を「甲」・「青洲先生門人録」³²⁾とし, 「青洲華岡先生門人姓名録」(F)を「乙」・「春林軒門人録」³³⁾として明確に区別し, 華岡青洲末裔所蔵の資料を原本にしていたものと推測される。

また, 上記(注)にも記したが, 7竹内の姓名は, A~Cが「竹内周貞」, 残りの門人録が「竹田周貞」と記載してあり, 年次順門人録である「門人録」・「四海門□□」(C)に傾倒したA・Bと, 国別門人録であるD~Hとの間には違いがみられるのである。

6. 華岡家門人録の特徴

上掲資料3で示したとおり, 出雲国から華岡家へ入門した門人をすべて記載した門人録は, 1冊たりとも存在していない。そのため, 華岡青洲や華岡流医術などについて研究する際には, 各々の門人録の特徴を十分に理解した上で活用することが重要である。

そこで, 出雲国の門人37人を事例として, 次の観点で華岡家門人録を分析し, それぞれの特徴を明らかにする。

(1) 「春林軒」・「合水堂」への入門

華岡家の医塾には, 紀州平山の「春林軒」, 大坂の「合水堂」が存在し, この他にも「楽水堂」や「堺」などの記載がみられる³⁴⁾。

ここで, 出雲国の門人37人の入門先をまとめると, 資料4のようになる。

資料4 門人の入門先

(「春」は「春林軒」, 「合」は「合水堂」を表す。)

- A 華岡青洲先生春林軒門人録
- B 華岡医塾門人録
- C 門人録・四海門□□
- D 華岡門人録
- E 稚府春林軒 門人姓名録
- F 青洲華岡先生門人姓名録
- G 華岡門人姓名録
- H 青洲華岡先生門人姓名録

入門先 門人名		入門先							
		A	B	C	D	E	F	G	H
1	高橋以忠	春	春	春	春	春	春	春	春
2	市川恭庵	春	春	春	春	春	春	春	春
3	西山砂保	春	春	春	春	春	春	春	春
4	中嶋道順	春	春	春	春	春	春	春	春
5	岡谷東民	春	春	春	春	春	春	春	春
6	小池文専	春	春	春	春	春	春	春	春
7	竹内周貞	春	春	春	春	春	春	春	春
8	古瀬保庵	春	春	春	春	春	春	春	春
9	小林文慶	春	春	春	春	春	春	春	春
10	石塚此面	合	合	合	合	合	合	合	合
11	広瀬玄廸	合	春	合	合	合	合	合	合
12	樋野寿山	合	合	合	合	合	合	合	合
13	長崎正伯	合	合	合	合	合	合	合	合
14	大田祐才	合	合	春	合	合	合	合	合
15	大森泰輔	合	合	合	春		春	合	春
16	大森加膳	合	合	合	合		合	春	合
17	梶谷昌軒	春	春	合	合				
18	飯塚養運	合	合	合	春		春		合
19	鈴木景順	合	合	合	合		春		合
20	井上橘水				合				
21	大田太仲	春	春	合	合		春		合
22	錦織玄道	春	春	春	合	春	春		春
23	井上惇達	春	春	春	合		春		

24	井上謙造	春	春	春	合		春		
25	小林友庵	春	春	春	合		春		
26	西原俊庵	春	春	春	合		春		
27	管 文淑	合	合		合		合		
28	舟木俊造	合	合		合		合		
29	川井春水	春	春	春	春	春	春		
30	清水順民	合	合	合	合		春		
31	大森加善	春	春	合	合		春		
32	米原文質	合	合	合	合		春		
33	岩田玄真	合	合	春	合	春	合		
34	牧内典礼			春	合				
35	牧野春斎			合	合				
36	福島元恭			合	合				
37	守田文亨						合		
総 数	「春林軒」 入門者	18	19	18	12	12	22	10	11
	「合水堂」 入門者	14	13	15	24	5	10	6	9

資料4に示すとおり、1高橋から14大田までの門人は、すべての門人録に姓名とともに「春林軒」・「合水堂」のいずれかの入門先が記載されている。そのうち9小林までは全員が「春林軒」へ入門しており、青洲の乳岩手術成功の情報を聞き、相次いで平山をめざしていたことが推測される。ところが、10石塚から「合水堂」への入門がみられ、11広瀬からは門人録により入門先に異同が生じている。さらに15大森からは記載漏れが顕著になっている。

この背景には、青洲が「春林軒」、鹿城が「合水堂」において門人指導を行っている時は、青洲を中心としてしっかりした華岡家の医塾経営が行われ、門人録の管理も厳重に行われていたと推定される。ところが、15大森が入門した頃から医塾経営や門人録の管理に緩みが生じ、門人録の記載にばらつきがみられるようになったものと考えられる。

一方、それぞれの門人録には、次のような特徴がみられる。

ア 先ほど呉氏は「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)をまとめる際、「門人録」・「四海門□□」(C)と「青洲華岡先生門人姓名録」(F)を参考にしたと指摘したが、ここでは明らかな違いがみられる。

つまり、呉氏はAをまとめる際、C・F以外の資料も参考にしたと推定される。しかし、それはD・E・G・Hのいずれの門人録とも一致せず、華岡青洲・鹿城末裔が所蔵する資料以外のものを利用したと考えられる。

したがって、Aを用いる際には、必ず他の門人録で確認する必要がある。

イ 冒頭において、「華岡医塾門人録」(B)は、「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)を引用したため、誤りもそのまま踏襲されたと述べたが、資料4をみると、Aと比較して1カ所ほど違っている。また、資料2の「記載期間」や「門人総数」、「年平均入門者数」もAと異なっている。

つまり、森慶三氏らはBをまとめる際、Aを引用した後、別の資料を基にして加筆・修正したものと考えられる。だが、その際に利用した資料は、現段階では確定できない。

したがって、Bを活用する場合には、Aと同様、必ず他の門人録で確認する必要がある。

ウ 「春林軒」と「合水堂」の入門者数をみると、「華岡門人録」(D)のみが「合水堂」への入門者が「春林軒」を上回り、残りの門人録はすべて「春林軒」への入門者が多い。

この理由は、Dが華岡鹿城末裔(分家)において所蔵・管理された門人録であることに對し、「門人録」・「四海門□□」(C)、「稚府春林軒門人姓名録」(E)、「青洲華岡先生門人姓名録」(F)は、華岡青洲末裔(本家)において所蔵・管理された門人録だからであろう。また、「華岡門人姓名録」(G)、「青洲華岡先生 門人姓名録」(H)は、「春林軒」へ入門した佐藤寛吾や飯塚玄道らが、そこで門人が管理する門人録を筆写した^{35,36)}からであろう。

したがって、門人録を所蔵する華岡家の医塾によって、またそれを管理する立場によって入門先の記載には違いがあったものと考えられる。

エ「稚府春林軒門人姓名録」(E)と「青洲華岡先生門人姓名録」(F)は、「春林軒」の門人数が「合水堂」のその2倍以上である。とくに、Eには「合水堂」へ入門したと思われる門人は、姓名すら記載されていない。

したがって、15大森が入門した頃から、「春林軒」側の強い意図が門人録の記載に反映するようになったものと考えられる。

(2) 入門期日について

華岡家門人録をみると、門人の入門期日の記載には、次の4通りがある。

- ・年号のみの記載があるもの
- ・年月の記載があるもの
- ・年月日の記載があるもの
- ・まったく記載がないもの

そこで、年月日の記載があるものに限ってまとめると、資料5のようになる。

資料5 年月日までの記載の有無
(年月日までの記載がある場合のみ○印を付す。)

- A 華岡青洲先生春林軒門人録
- B 華岡医塾門人録
- C 門人録・四海門□□
- D 華岡門人録
- E 稚府春林軒 門人姓名録
- F 青洲華岡先生門人姓名録
- G 華岡門人姓名録
- H 青洲華岡先生門人姓名録

門人名		年月日の有無							
		A	B	C	D	E	F	G	H
1	高橋以忠	○	○	○					
2	市川恭庵			○ (注)					
3	西山砂保	○	○	○					
4	中嶋道順	○	○	○					
5	岡谷東民	○	○	○					
6	小池文専	○	○	○					
7	竹内周貞	○	○	○					
8	古瀬保庵	○	○	○					
9	小林文慶	○	○	○					
10	石塚此面	○	○	○					
11	広瀬玄廸	○	○	○					

12	樋野壽山	○	○	○								
13	長崎正伯	○	○	○								
14	大田祐才	○	○	○								
15	大森泰輔	○	○	○								
16	大森加膳	○	○	○								
17	梶谷昌軒	○	○	○								
18	飯塚養運	○	○	○								
19	鈴木景順	○	○	○								
20	井上橋水											
21	大田太仲	○	○	○								
22	錦織玄道	○	○	○								○
23	井上惇達	○	○	○	○							
24	井上謙造	○	○	○	○							
25	小林友庵	○	○	○	○							
26	西原俊庵	○	○	○	○							
27	管 文淑	○	○		○				○			
28	舟木俊造	○	○		○				○			
29	川井春水	○	○	○	○				○			
30	清水順民	○	○	○	○							
31	大森加善	○	○	○	○							
32	米原文質	○	○	○	○				○			
33	岩田玄真	○	○	○	○				○			
34	牧内典礼				○	○						
35	牧野春斎				○	○						
36	福島元恭				○	○						
37	守田文亭								○			
年月日記載 門人総数		31	31	32	14	0	6	0	1			

(注) 市川恭庵の入門は「右 同」と記載されており、前後の状況から、「同」は「文化六年己十一月四日 雲州能儀郡広瀬」までを指すものと判断した。

資料5によると、「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)と「華岡医塾門人録」(B)はまったく同じであり、やはりBはAをそのまま引用したものと考えられる。

一方、最初から入門年月日を記載しようとしていた門人録は、「門人録」・「四海門□□」(C)のみであり、国別門人録をまとめる以前に年次順門人録が存在していた³⁷⁾ことはまず間違いなく、

それこそがこの2冊の門人録と考えられる。

ここで、「門人録」・「四海門□□」(C), 「華岡門人録」(D), 「青洲華岡先生門人姓名録」(F)を基にして出雲国の門人の入門年月日をまとめると、資料6のようになる。

資料6 出雲国の門人の入門期日
(門人名とその順序は上記と同じとする.)

順	門人名	入門期日
1	高橋以忠	文化6年11月4日
2	市川恭庵	文化6年11月4日
3	西山砂保	文化8年3月19日
4	中嶋道順	文化8年3月19日
5	岡谷東民	文化11年5月4日
6	小池文専	文化15年4月27日
7	竹内周貞	文政2年4月16日
8	古瀬保庵	文政2年4月16日
9	小林文慶	文政2年4月16日
10	石塚此面	文政2年3月10日
11	広瀬玄廸	文政2年2月17日
12	樋野壽山	文政8年2月24日
13	長崎正伯	文政8年5月13日
14	大田祐才	文政8年10月2日
15	大森泰輔	天保4年3月2日
16	大森加膳	天保6年正月29日
17	梶谷昌軒	天保7年7月29日
18	飯塚養運	天保9年6月24日
19	鈴木景順	天保11年5月15日
20	井上橘水	天保12年正月(注1)
21	大田太仲	天保12年6月25日
22	錦織玄道	天保15年3月14日
23	井上惇達	嘉永3年5月12日
24	井上謙造	嘉永5年5月19日
25	小林友庵	嘉永6年2月3日
26	西原俊庵	嘉永6年4月12日
27	管 文淑	安政3年8月23日(注1)
28	舟木俊造	安政3年9月5日(注1)
29	川井春水	安政3年4月11日
30	清水順民	安政4年6月15日

31	大森加善	安政4年閏5月3日
32	米原文質	安政5年6月8日
33	岩田玄真	文久3年2月24日
34	牧内典礼	元治元年6月14日
35	牧野春斎	慶応元年5月7日
36	福島元恭	慶応3年3月朔日
37	守田文亭	明治2年5月21日(注2)

(注1)「華岡門人録」(D)による。

(注2)「青洲華岡先生門人姓名録」(F)による。

資料6により、出雲国からの入門は文化年間6人、文政年間8人、天保年間8人、嘉永年間4人、安政年間6人、それ以降が5人である。そして、青洲が亡くなった天保6年(1835)10月2日を境にしてみると、生前の門人が16人、没後の門人が21人となり、青洲没後に入門した門人が多いことが判明する。

一方、文政2年(1819)に入門した7竹内から11広瀬までの5人について、資料4と資料6を重ねてみると、先に「合水堂」へ入門した10石塚と11広瀬の2人は、「春林軒」へ入門した7竹内、8古瀬、9小林の後に記載されている。これは、「合水堂」へ入門した2人は、後日、「合水堂」から「春林軒」へ報告されたことによるものであろう。

したがって、鹿城が病没するまでの華岡家では、「合水堂」から「春林軒」へ入門者を報告するシステムがあり、この両塾には本塾・分塾という明確な上下関係ができあがっていたものと考えられる。

ところが、資料3、資料4、資料6を重ねてみると、15大森が入門した天保4年(1833)頃から門人録の記載にはばらつきがみられる。とくに、資料4の「華岡門人録」(D)をみると、青洲が亡くなった天保6年(1835)10月2日以降、「合水堂」への入門者18人に対し、「春林軒」のそれは2人ほどである。また、「稚府春林軒 門人姓名録」(E)をみると、「春林軒」への入門者が3人だけ記載されるのみで、「合水堂」への入門者は、すべて削除されたものと思われる。

さらに、資料5と資料6を重ねてみると、23井上が入門した嘉永3年(1850)頃から「合水堂」

でも「春林軒」と同じように入門年月日まで記載するようになっており、それまでの本塾・分塾の関係に変化が生じていたことがうかがえる。

こうした状況から、青洲の逝去を契機として、華岡家の医塾経営・管理には少しずつ緩みが生じ、同時に「春林軒」・「合水堂」の上下関係にも変化が現れるようになったものと考えられる。

7. まとめ

総数9冊、8種の華岡家門人録を比較するとともに、出雲国の門人37人を事例として、それぞれの特徴をまとめると次のとおりである。

(1) 華岡青洲先生春林軒門人録 (A)

華岡青洲研究において、初めて門人名が公表された先駆的な国別門人録である。今回、これは華岡青洲末裔所蔵の「門人録」・「四海門□□」(C)と「青洲華岡先生門人姓名録」(F)を原本とし、さらに、他の資料も加えてまとめたものであることが判明した。しかし、その資料は華岡青洲・鹿城末裔所蔵のものとは一致せず、呉氏が華岡家以外の資料を参考にしていただいたものと思われる。

したがって、今後、Aを用いる際には必ず華岡青洲・鹿城末裔宅に所蔵される門人録により確認する必要がある。

(2) 華岡医塾門人録 (B)

これは「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)を引用しているため、その誤りがそのまま踏襲されている。

しかし、Aと比較すると、「記載期間」、「門人総数」「年平均入門者数」(資料2参照)、「入門先」(資料4参照)などが異なっており、別の資料を基にして加筆・修正したのと考えられるが、その資料は華岡青洲・鹿城末裔所蔵のものとは一致せず、華岡家以外の資料を参考にしたものと思われる。

今後、Bを用いる際にはAと同様、必ず華岡青洲・鹿城末裔宅に所蔵される門人録により確認する必要がある。

(3) 門人録・四海門□□ (C)

本塾「春林軒」において管理され、華岡青洲末裔宅に所蔵された唯一の年次順門人録である。これは「門人録」を前編、「四海門□□」を後編とする2冊で1組として構成され、青洲(3代随賢)、鶯洲(4代)、厚堂(5代)にわたる門人2,060人について、住所や請(更)人などが非常に詳しく書き留められている。内容からみて、華岡家ではこの2冊を基にして国別門人録を編集したのと考えられる。

呉氏が『華岡青洲先生及其外科』の中で、「甲」・「青洲先生門人録」と表現した門人録はまさにこれであり、これを原本として「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)をまとめたものと考えられる。この中で「元治以後」は国別の門人数のみが記載されたが、この門人録によりその姓名がほぼ判明する。

今後、華岡青洲や華岡流医術を研究する場合には、最初に手に取るべき貴重な資料である。

(4) 華岡門人録 (D)

分塾「合水堂」において管理され、華岡鹿城末裔宅に所蔵された国別門人録である。また、唯一、「合水堂」へ入門した門人数が「春林軒」のそれを大きく上回っている門人録であり、初めて華岡家門人が2,000人を超えていることが判明したものである。

これまでの華岡青洲研究は「春林軒」を中心として行われてきたが、今後は「春林軒」と「合水堂」の両方から考えていく必要がある。その点で「合水堂」側から記載された本資料は貴重であり、大いに活用されるべきものである。

(5) 稚府春林軒 門人姓名録 (E)

華岡青洲末裔宅に所蔵された国別門人録である。しかし、天保4年(1833)以降、出雲国から「合水堂」へ入門した門人は姓名が記載されていない。その結果、門人総数は「門人録」・「四海門□□」(C)の55.8%、「華岡門人録」(D)の57.3%ほどであり、この門人録の記載には、「春林軒」側の強い私意が感じられる。

したがって、今後、Eを用いる場合にはこうした特徴を十分留意し、かつ明確な目的・視点をもって活用することが大切である。

(6) 青洲華岡先生門人姓名録 (F)

本塾「春林軒」において管理され、華岡青洲末裔宅に所蔵された国別門人録である。呉氏が『華岡青洲先生及其外科』の中で「乙」・「春林軒門人録」と表現した門人録は、まさにこれである。彼は、この中に「山田好謙」の名前を見つけ、これを原本として「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)をまとめたものと考えられる。

一方、「竹内周貞」ではなく「竹田周貞」と記載した国別門人録5種(D~H)の中で、本資料は華岡青洲末裔が所蔵し、門人数が最も多いものである。そのため、これは国別門人録の嚆矢であり、その時期は6小池と7竹内の入門時期の間である文政元年(1818)頃と推測され、今後の華岡青洲研究には欠かせない資料である。

(7) 華岡門人姓名録 (G)

越後国から天保3年(1832)6月12日に入門した佐藤寛吾が、「春林軒」において門人が管理する国別門人録を筆写したものである。彼の入門時期から考えると、青洲が生存中の門人録であり、「直門としての門人姓名録」³⁸⁾という意味合いをもっている。

今後、青洲の逝去が門人にどのような影響を及ぼしたか研究する際には、ぜひ活用すべき貴重な資料である。

(8) 青洲華岡先生門人姓名録 (H)

出雲国から天保15年(1844)3月14日に入門した飯塚玄道が、「春林軒」において門人が管理する国別門人録を筆写したものである。これによって、「春林軒」には本家が管理・所蔵する国別門人録と、門人が自分たちで管理する国別門人録が存在していたことが判明した。

今後、国別門人録の系統を研究する際には、ぜひ活用すべき貴重な資料である。

8. おわりに

華岡家門人録9冊、8種を検討した結果、出雲国から華岡家へ入門した門人は37人であり、それを通してそれぞれの門人録を分析すると、各々に顕著な特徴がみられた。今後、華岡青洲や華岡流医術の伝播などについて研究する場合には、その特徴を十分に踏まえながら活用する必要がある。中でも、華岡青洲末裔宅に所蔵される「門人録」・「四海門□□」(C)、「青洲華岡先生門人姓名録」(F)、「華岡鹿城末裔宅に所蔵される「華岡門人録」(D)は、必見の資料である。

一方、今回行ったような手順により各国別ごとに門人を確定すると、「華岡青洲先生春林軒門人録」(A)の1,883人に「元治以後ノ門人国別数」の305人³⁹⁾を加えた2,188人を上回り、ほぼ2,200人を超えるであろう。

同時に、青洲没後の門人が生前の門人を上回っていた事実から、これまでの華岡青洲を中心とした研究から、彼の跡を引き継いだ鷺洲(4代随賢)、厚堂(5代随賢)、また、「合水堂」の経営に尽力した南洋、積軒らも含めて総合的に研究する必要がある。それによって、西洋の麻酔薬が普及しつつあった明治15年(1882)まで、華岡家へ入門する門人が存在し、華岡流医術を学んでいた背景を突き止めることが可能になるものと考えている。

今後、華岡青洲・鹿城末裔が所蔵する資料を中心として、さらに華岡流医術の研究を深めていきたいと考えている。

謝 辞

これまで多くの資料を閲覧・写真撮影させていただき、本稿の公表につきましてもご快諾いただきました札幌市の華岡青洲末裔のご家族の皆様からお礼を申し上げます。

また、本稿執筆に際し、多くのご助言・ご教示を賜りました華岡青洲末裔、華岡鹿城末裔のご家族の皆様、和歌山市立博物館学芸員高橋克伸氏に紙面を借りてお礼を申し上げます。とくに、ご多忙にもかかわらず、何度も丁寧にご指導いただき

ました弘前大学名誉教授松木明知先生には、心から感謝を申し上げます。

文献

- 1) 呉秀三. 華岡青洲先生及其外科. 復刻版. 東京: 大空社; 1994. p. 260
- 2) 梶谷光弘. 天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について (1). 古代文化研究 2007; (15): 71-100
- 3) 梶谷光弘. 天保五年当時の華岡家「春林軒」における医学修業の実態について (2). 同 2008; (16): 105-137
- 4) 松木明知. 華岡青洲の新研究. 東京: 岩波出版サービスセンター; 2002. ii
- 5) 高橋克伸校訂. 華岡家所蔵「門人録」翻刻資料. 国立歴史民俗博物館研究報告 2004; 116: 498-499
- 6) 文献 1) p. 275
- 7) 文献 5) 499-500
- 8) 文献 1) p. 108
- 9) 文献 2, 3)
- 10) 梶谷光弘. 華岡家門人大森家の史料目録—3代目不明堂三楽・4代目三益・5代目六四郎の関係史料—. 山陰史談 2000; (29): 86-106
- 11) 梶谷光弘. 母里藩の医者大森不明堂三楽の生涯—出雲国への華岡流医術の伝播—. 山陰史談 2003; (31): 41-86
- 12) 島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会編. 華岡流医術の世界—華岡青洲とその門人たちの軌跡—. 出雲: ワン・ライン; 2008. p. 26-34・p. 46-113・p. 207-238
- 13) 梶谷光弘. コレクション紹介: 大森文庫の価値について—華岡流医術の真髄とその地方伝播の実態を解明する鍵—. 崧雲 2015; (17): 13-31
- 14) 梶谷光弘. 華岡鹿城末裔所蔵の「華岡門人録」について (1)-(4). 日本医史学雑誌 2012; 58(1): 75-84・58(3): 401-409・58(4): 493-501・2013; 59(1): 97-104
- 15) 梶谷光弘. 華岡青洲 (3代随賢) 末裔 (本家) 所蔵の国別門人録について (1)-(4). 日本医史学雑誌 2013; 59(3): 425-440・59(4): 571-585・2014; 60(1): 71-85・60(3): 285-296
- 16) 梶谷光弘. 華岡家門人錦織玄道が筆写した「華岡青洲先生門人姓名録」について (翻刻). 古代文化研究 2014; (22): 87-110
- 17) 「国別門人録」と「年次順門人録」に区別する. (高橋克伸. 佐藤寛吾写「華岡門人姓名録」について・下. 和歌山市立博物館研究紀要 2014; (29): 3
- 18) 文献 5) 498-537
- 19) 年次順門人録には「雲州」, 国別門人録には「出雲」と記載され, 使い分けがなされている.
- 20) 文献 1) 正誤表 p. 5
- 21) 同書. 序 p. 14
- 22) 同書. p. 482
- 23) 森慶三・市原硬・竹林弘. 医聖華岡青洲. 和歌山: 医聖華岡青洲先生顕彰会; 1964. p. 324
- 24) 文献 5) 537
- 25) 同書. 498-537
- 26) 「慶応二丙寅十一月四日」の後に空白があり, 門人がいたと思われるが, 姓名が記載されていないため総数には加えていない. (四海門□□. 華岡青洲末裔所蔵; 180丁ウ)
- 27) 同書. 152丁オ
- 28) 同書. 230丁オ
- 29) 同書. 215丁オ
- 30) 文献 1) p. 517-518
- 31) 同書. p. 449-518
- 32) 同書. p. 188
- 33) 同書. 序 p. 14・p. 193
- 34) 「華岡青洲先生春林軒門人録」には「楽水堂 (合水堂改)」・「堺」, 「門人録」には「堺門人」・「鹿城先生門人」・「鹿城先生」などの記載がみられる.
- 35) 文献 16) 107-109
- 36) 文献 17) 3-5
- 37) 高橋克伸. 春林軒「門人録」について. 国立歴史民俗博物館研究報告 2004; 116: 454
- 38) 文献 17) 5
- 39) 文献 1) p. 517-518

付記

これまで華岡鹿城末裔宅に所蔵されていた資料は, 現在, 武田科学財団杏雨書屋に所蔵されている。

The Features of the Hanaoka Family Students' Records, Based on an Analysis of 37 Students from Izumo

Mitsuhiro KAJITANI

Faculty of Medicine, Shimane University

The descendants of Hanaoka Seishu (華岡青洲) are in possession of an unpublished list of his students, titled “Shikaimon” (四海門). Judging from its contents, it is an appendix of the “Monjinroku” (門人録), which consists of a systematic and chronological list of students. Including this list, the Hanaoka family possesses nine students' lists in total, with eight different types. These lists record Hanaoka Seishu's students' names. Thirty-seven students who were from the Izumo District are found in these lists. However, there is not a single list in which all of the students from Izumo District are listed. Therefore, it is very important to understand the features of each of the students' lists correctly, and then to make use of them in order to study Hanaoka Seishu and the Hanaoka style of medicine. Further investigation is especially needed in regard to the contents of the “Monjinroku”, the “Shikaimon”, and the “Seishu Hanaoka-sensei monjin seimeiroku” (青洲華岡先生門人姓名録), which are held by Hanaoka Seishu's descendants, and the “Hanaoka monjinroku” (華岡門人録), which is held by Hanaoka Rokujiyo's (華岡鹿城) descendants, since these four lists are of great importance and value for researchers.

Key words: Hanaoka Seishu, Hanaoka Rokujiyo, registers of Hanaoka's schools, students from Izumo, the features of lists